

「21 COE: 比喩理解への認知的アプローチ」の 口頭発表でのフロアからの質問，コメントに答える

黒田 航*

野澤 元†

1 はじめに

筆者は 01/31, 02/01/2004 に京都大学 100 周年記念会館で開かれた「21COE 比喩理解への認知的アプローチ」の第一セッション(01/31)で『比喩理解におけるフレーム的知識の重要性: FrameNet との接点』と題する口頭発表を行った。発表終了後、およびセッションの最後にフロアから幾つかの質問を受けた。それらの質問に対して、この場で正式な回答を公開する。

質問、コメントは全部で9つあった。篠原和子氏(東京農工大学)から一つ、徳永健伸氏(東京工業大学)から一つ、鍋島弘治郎氏(関西大学)から二つ、瀬戸賢一氏(大阪市立大学)から一つ、山梨正明氏(京都大学)から二つ、金杉高雄氏(太成学院大学)から一つ、藤巻慎一氏(神戸大学大学院)から一つ、である。以下、この順でおのおのの質問について、質問者の氏名、質問の番号、質問の概略を示し、それに私の回答を続けるという形で記述する。

2 9つの(主に批判的な)質問、コメントへの正式な回答

回答に先立って、私の発表では強調されなかった FrameNet (FN) の本来の目標をここで明確にしておきたい。FN の本来の目標は**文字通りの意味をしっかりと記述すること**であって¹⁾、比喩的効果の記述は射程に入っていない。この点で、私の発表した内容は、FN の本来の方向づけからすると**完全に異端**である。このことを発表の際に明確にしなかったのは、FN 自体にとっては些か問題があったかも知れ

ない。というわけで、私としては自分の研究を FN の典型的な研究ではなく、あくまでも例外的で異端的な応用的研究として理解して欲しいと思う。

異端であっても、このような応用研究に意義がないわけではない。実際、FN の観点から比喩性を検討することは、次の点を尖端化する：**比喩の意味は非比喩の意味との対立でしか語れない**。換言するならば、**非比喩の意味がどういうものであるかが分からない限り、比喩は分からない**。

私は、この点で今回の自分の発表が従来のメタファー研究の本質の問題点を正しくえぐりだしているように思う。**従来のメタファー論は文字通りの意味が何であるかが自明であるかのような仮定の上に成立しているが、実はこれはまったく正しくない**。

実際、非比喩的意味とは何か、それはまだまだ分かっていないのである。そして、それが正に非比喩的意味の妥当な記述のためのプロジェクトとして FN が存在する意義である。

次のことは注意を要する。**文字通りの意味の記述は、比喩的意味の記述より困難なのである**。比喩的意味は非比喩的な意味との差として現われるから、相対的に記述しやすい。

ということは、あまりにメタファーに関心を寄せることは、非メタファー的、つまり、本来の意味の記述が必要であるという事態を忘れさせる効果があり、非比喩的意味の記述をないがしろにする傾向に拍車をかけることにもなりかねない。これは従来の比喩研究に関して私が危惧する点の一つである。

要するに、**比喩的意味と非比喩的意味との橋渡しが必要なのであり**、この点で、FN の研究が将来に渡って進むことで、その目標である非比喩的な意味の研究ばかりでなく、比喩的な意味の研究にも大きな貢献がなされると期待する。

このような一般的な注意の下で、以下、私の発表への(主に批判的な)質問、コメントに回答したいと

* (独) 情報通信研究機構 けいはんな情報通信融合研究センター

† 京都大学人間・環境学研究所

¹⁾ この重要な点は、鍋島弘治郎氏と黒宮公彦氏(大阪学院大学)との発表後の議論の中で明らかになった。ここで両氏にお礼を申し上げる。

思う。

2.1

篠原和子 認知言語学が比喩と非比喩的な用法の区別が1/0であると主張したことはないはず

認知言語学のモットーからするとそのはずなのだが、不思議なことに、それは実践的には正しくない。私の知っているどの比喩の論文でも比喩の段階性を正面切って扱っていない。これはむしろ、今の認知言語学に「表と裏」の乖離が、「掛け声と実践」との間に矛盾があると言うべきなのではないかと思う。実際、私には放射状カテゴリー論を擁護する Lakoff と比喩写像を推進する Lakoff は別人のように思える。これは黒宮公彦氏がいみじくも指摘してくれた点なのだが、**比喩写像理論の現在の定式化は放射状カテゴリー論と無関係であり、互換性があるかどうか怪しい**。実際、**私たちの提案する比喩の理論は、メタファーの程度の差を表現し、放射状カテゴリー論の基本に沿ったメタファー論だ**と言うことができると思う。

2.2

徳永健伸 「狼が小羊を襲った」には比喩的な解釈もある。それはどうやって説明するのか？

この質問に対する私のその場での回答は些か不適切だったように思う（例えば、私はこの現象がメトニミーだと答えたような覚えがあるが、勘違いしていたようだ）。

「狼が小羊を襲った」が「ある人が他のある人を襲った」の比喩として解釈される場合、〈動物行動の領域〉から〈人間行動の領域〉への写像が想定される必要がある。が、まずここで確認しておく必要があるのは、**標的領域と源泉領域と隔たりが写像理論が要求するほど十分に大きいのか**という点である。フレーム意味論的分析によれば、源泉と標的はいずれも〈生体間の抗争〉の二つの下位フレーム〈捕食を目的とした動物の襲撃〉と〈人の他個体への暴力的攻撃〉となっていて、その差は素性で表現すれば [±human] だけである。これは比喩写像が機能するのに十分な格差なのか？ 現時点で、この問いに写

像理論が満足の行く形で答えられるとは思われない。私の知るすべての研究で、**写像の成立は前提とされており、その条件が述べられることはない**。

結論として言えるのは、問題の核心は「最重要な説明概念の一つである領域とは、そもそも何か」ことにあり、写像理論はこの点に関して、非常に不明確であり、写像理論で適切に扱えているか、実は怪しいのである。

結局、FrameNet に基づく比喩効果へのアプローチは、仮に私が主張したように比喩写像の非根源性を説得的に示すには至らなくとも、**「領域とは何か」という重要な経験的問題には非常に明確な答えを提供する可能性がある**わけであり、この点で、比喩理論全体にまちがいなく大きな貢献をすると考えられる。

2.3

銅島弘治郎 1 扱っている現象は単に「襲う」の語の多義性の分析であって、概念的比喩の問題ではないのでは？ [事前の打ち合わせ中の質問]

これは正しくないが、残念ながら、このことを口頭発表の際には有効に示すことができなかった。しかも、この点は私たちの主張に関して根本的に重要な問題にもなる。これに関して、以下、なるべく詳細に論じることにする。

仮に「襲う」のプロトタイプの意味が F_1 : A DANGEROUS ANIMAL ATTACKS A VICTIM だとしよう²⁾。この仮定の下では例えば、「国が他国を襲った」の比喩性は、 G_1, G_2, G_3 を F_1 に適用した結果、すなわち：

[[A NATION AS A PERSON] AS A DANGEROUS ANIMAL ATTACKS [[A NATION AS A PERSON AS] AS A VICTIM]

として得られる。

(1) 国

G_1 : NATION IS A PERSON

G_2 : PERSON IS A DANGEROUS ANIMAL

G_3 : PERSON IS A VICTIM

²⁾ F_1 の代わりに F_2 : A MALICIOUS PERSON ATTACKS A VICTIM でもよい。どちらにしても、結果は同じである。

これは一見すると、概念比喩の組み合わせによる比喩効果の説明にはなっている。だが、 G_2, G_3 のような概念的比喩が存在すると仮定するのは(恣意的以前に)このやり方で説明できないものは存在しないほどに強力な説明ではないのか？

同様に、「病気の症状が人を襲った」では F_1 に G_2, H_1 を適用した結果、すなわち：

[[SYMPTOM AS A DISEASE (ITSELF)] AS A DANGEROUS ANIMAL] ATTACKS [A VICTIM]

だと記述できるし、写像主義者なら、そうしなければ一貫性に欠けるであろう。

(2) 病気

G_2 : DISEASE IS A DANGEROUS ANIMAL

H_1 : SYMPTOM IS A DISEASE (ITSELF)

同様に、「不況が市場を襲った」は、攻撃の領域から病気の領域を経由して経済の領域への写像が次のように関与していると考えることが可能である³⁾。そうならば F_1 に (3) の写像を適用し、「不況が市場を襲った」の意味表示は

[A DISEASE AS A DANGEROUS ANIMAL] ATTACKS [MARKET AS A SICK BODY PART] AS A PATIENT] AS A PERSON] AS A VICTIM]

と表示されうるし、写像主義者がそうしないなら、一貫性に欠けるだろう。

(3) 不況

G_2 : DISEASE IS A DANGEROUS ANIMAL

G_3 : PERSON IS A VICTIM

G_4 : ENONOMY IS A PERSON [\Leftarrow ECONOMY IS AN ORGANIZATION]

I_1 : PATIENT IS A PERSON

I_2 : SICK BODY IS A PATIENT

I_3 : MARKET IS A SICK BODY PART

しかし、この一見うまく言っているように見える分析は、私たちが中本敬子(京都大学教育学部)と共同で行った実験の多次元尺度法(MDS)などの解

³⁾ MARKET IS A PLACE とし、途中の病気の比喩をバイパスすることは可能ではある。その場合 [[INFLATION AS A DISASTER] AS A DANGEROUS ANIMAL] ATTACKS [[A PLACE AS PEOPLE] AS A VICTIM] のような比喩内容の表示が得られるだろう

析結果によっては支持されない。同様の派生となるはずの「不安が彼を襲った」がほかのどの例ともクラスターを構成せず、完全に外れているのである。従って、理論的には可能であっても、心理的実在性は薄いと言わざるを得ない。

このことから、次のように考えるのは妥当である。**写像の距離は源泉から標的までに利用された比喩写像の数に比例する。**これは一見正しそうに見えるが、経験的には支持されない。**このような回数は、観察される比喩性とは直接相関がないのである。**これは、**写像の複雑さは、そのままでは結ばれている領域間の距離の指標としては使えない**ということを意味する。もちろん、これらから現実的な指標を構成することは不可能ではないかも知れない。が、あまり期待のもてる方向ではないように思われる。

もう一つの困難は、 F_1 が本当にプロトタイプ的な「襲う」の意味で、すべての写像の源泉になっているのか？という問題である。この点は、中本が採った行動データの解析から見る限り、極めて怪しい。A, B のあいだの写像は途中で切れており、両者が独自の自立性を有している可能性が強く示唆されている。となると、源泉領域を絞れないことになる。これは写像理論にとってはややこしい問題となるはずである。

2.4

鍋島弘治郎 2 FN の比喩効果の記述が仮に妥当だとしても、それには冗長性が多く、洗練されたやり方ではないのでは？[事前の打ち合わせ中の質問]

冗長性を厭わない記述は FN の基本精神である。**その冗長性と引換えに記述的妥当性が得られるならば、何の問題もない。**妥当な説明は妥当な記述に先行することはない。むしろ、従来の概念メタファー説では、コーパスから例を体系的に拾った事例に基づく研究は皆無であり、強い理論的なバイアスの係った中途半端な作例に基づく信頼性の低い説明となっているのでは？

2.5

瀬戸賢一 スキーマ性と写像性は程度の問題で、優劣を論じてもしようがないのでは？

スキーマ性と写像性の違いが程度だと言えるか怪しいが、仮にそうだとすると、**それはいったい「何の程度」の問題なのか？** 程度の問題でお茶を濁す前に、それを明らかにするのが重要である。また、いずれの説明が妥当であるか、その妥当性の評価の方法を確立しないで程度の問題で済ませるのは、単に問題をウヤムヤにすることであり、言語学が経験科学であるならば — 私はそうだと信じているが — それは明らかに有意義ではないと私は考える。

2.6

金杉高男 [+animate] という素性は [+human] から予測でき、冗長ではないのか？

FN の出発点は言語事実の妥当な記述の提供であり、説明ではない。重要なことに、**記述的妥当性に繋がる冗長性は、今の段階では厭わない**。十分に妥当な記述を得るためには、敢えて洗練を求めない、とすら言える。

FN は用法基盤、ボトムアップの精神の権化である。問題から独立に設定された条件を記述が満足しないかぎり、説明を始めないというのが私の理解する FN の基本精神である。

この点から見ると、概念メタファーによる比喩効果の説明はトップダウン的であることに気づく。

次のことにはことさら注意を要する。**現在、認知言語学の主流では用法基盤は掛け声だけで真剣に実践されていない**。その証拠に、比喩写像理論は用法基盤ではなく、能力基盤の説明をする。なぜなら、それは比喩効果についてトップダウン的な説明スタイル「このような比喩写像/概念比喩を認めれば、このような比喩性を説明できる」という説明スタイルを取るからである。これは、生成変形文法が取っている説明スタイル:「このような文法規則/普遍文法の原則を認めれば、このような文の文法性（あるいは非文法性）を説明できる」と同じ**仮説演繹的な説明スタイル**である。そして、そのほとんどの事実の説明に、わざわざ普遍文法のような大掛かりな装置を持ち出す必要がないことは、敢えて指摘するまでもない。言い換えると、比喩写像理論と生成言語学

の文法の説明は、異なっているのは対象の性質だけで、説明のスタイルは同一なのである。

この点で興味深いのは、§2.3 で私が試みた写像に基づく分析が**生成意味論が盛んだった頃の語彙分解に非常に良く似ている**という点である。同様のことが Grady 1997 の原初的比喩の分析に関しても言える。**私にはこの還元主義的な傾向が正しい方向に向かっているとは、とうてい思われぬ**。実際、それは、**創発性の科学の目指す方向と反対である**。

ここで一つ補足しておく、経験基盤主義を取ることと仮説演繹的な説明スタイルを取るとは独立の性質であり、混同されてはならない。前者から後者の性質は否定されない。

文法規則は文法の特徴づけにおいて、非常に有用である。だが、有用性は正確に理解されなければならない。文法規則が有用なのは、それが文法をうまく説明するからではなく、うまく記述するからである。

記述的一般化としての比喩写像の有用性は、それと同様に理解されるべきである。比喩写像が有用なのは、それが比喩体系をうまく説明するからではなく、うまく記述するからである。従って比喩体系の規則としての比喩写像群は比喩体系の特徴づけであって、説明ではないのである。

このことは正確に理解されるべきだと思う。さもないと、認知意味論は生成文法が失敗したのと同じ理由で失敗することになる。生成文法は約 40 年前、規則によって文法を説明しようと空しく試みた。そして、この試みは失敗するべくして失敗した。これが意味することは、認知意味論が比喩写像によって比喩を説明しようとすれば、これと同じ失敗が待ちかまえているということである。

2.7

山梨正明 1 昔の変形生成文法と同じように意味素性のような怪しげなものを使ってフレームを記述するのは妥当なのか？

素性表示は強力な記述手段であり、有効に使えると判断される限り、使わない理由はない。もう一つ重要な点として、**素性=特徴表現は心理実験で頻繁に用いられる多段階評定と非常に相性が良い**という事実が指摘できる。心理実験で妥当性を検証する際の便宜を考えても、意味素性を用いるのは極めて有

効な手法である。

更に、メタ方法論的な観点からは、次のことに特に注意を喚起しておきたい。**記述のための装置の妥当性の評価は、それが可能にする記述的、説明的結果のみによってのみ定めらるべき**であり、哲学的な理由、個人的な好み、言語学内部での派閥的な差別化などの理由から、始めから有効性を疑うのは、**明らかに非科学的なバイアスだ**と言える。「坊主憎けりゃ、袈裟まで憎い」というのは大人気ない。

思いの外、私がスキーマ性を表現するために素性表示を利用したことには反発があるようだ。私が見る限り、このことにはどうも根深い誤解があるようだ。実際、多くの認知言語学者が素性表示を退ける理由は教条的であり、実証的根拠があつてのことではない。また、その根拠と思われるものも、詳細に検討すると、実はまったく妥当でないことがすぐに分る。以下ではそれを例証することにするが、具体的に何が問題なのかを論じる前に、私はまず次のことを指摘しておきたい。**比喩写像の理論を含め、認知言語学は表示 representation というものをまったく真剣に考えない。もっと具体的に言うと、特に図を使ってなされるインフォーマルな記述法の背後にどんな神経心理学的な内容が存在するのか真剣に考えている研究者は皆無である。**これに対し、私が素性表示を導入する最大の理由は、**それが認知科学的、認知心理学的、神経生理学的に考えてもっとも合理的だと判断したから**である。

まず私は、認知言語学の形式主義・実証主義への反発にはあまり本質的ではない部分があるということを指摘しておきたい。一例を上げると、Lakoff は “Hedges: A study in meaning criteria and the logic of fuzzy concepts” (1972) で L. Zadeh の fuzzy sets の概念をいったん持ち上げておきながら、その後、1987 でその有効性を退けた。Lakoff は fuzzy sets/concepts が潜在的な有している形式主義への危険性を見て取り、退けたように思われるが、私にはこの拒絶が完全に恣意的だと思える。

Lakoff (1987) にある「放射状カテゴリー論が共通特性の集合の存在を否定する」という議論は明らかに妥当性に欠ける。例えば、**mother** が放射状カテゴリーをなし、共通特性が存在しないという議論を読んで、あれが素性表示を退ける根拠になりうると納得できる幸せな研究者は、以下に述べる理由か

ら認知の内実に関して何も知らないに等しく、自分の枠組みが脳の神経生理学と矛盾していると感じていないらしい。

共通特徴の存在の否認は、今の認知意味論で様々な形の歪みとなって現われているが、最近では別の動きもある。論文で言及したように、Fauconnier and Turner (1994) で定義された**比喩のブレンド理論 blending theory of metaphor** は、そのような共通性の否定のテーゼを受け入れていない。これは、ブレンド理論で**一般スペース generic space** がどんな役割をもっているのかを考えてみれば、直ちに明らかになることである。論文では詳しく論じなかったが、**一般スペースは、私たちが提唱した上位スキーマ化モデルとまったく同じ役割を演じている。**

さて、放射状カテゴリー論がスキーマの素性表示を退ける根拠になりえない理由は、次の事実からほとんど自明である。

B. 脳内表現はすべてニューロンによって行われるのであり、ニューロン一つ一つがしていることは(極端に話を簡単にすると)素性のコーディングである

ただし、ここでは micro-feature と macro-feature の区別、あるいは perceptual-level feature と conceptual-level feature のような区別は特に問題にしない。

(B) は、具体的な事例であろうと何だろうと、**脳内ではあらゆるものが抽象的に表現されている**ことを意味する。あなたが猫を見る時、その猫は脳内には棲んでいない!

この一方で、次のことは認知科学の共通理解である。

C. スキーマは素性の束である

認知科学では、**スキーマは個別事例とは別個に実在すると**考えられており、その証拠も多い⁴⁾。

これに対し、**概念 concepts** というものが何であるか、はたしてそれが実在するかに関して、認知科学では共通の理解はなく、存在の根拠も明白ではない。概念がスキーマの一種であると想定する枠組みならば、このことは特に問題にならないが、これに

⁴⁾ Langacker は確か、どこかでスキーマが事例に eminent だとか言っているが、その根拠は示されていない。

対し、スキーマと独立に概念を想定する枠組みは、**概念の存在に対し立証責任を負う**ことになる。ところが、認知言語学、認知意味論は、概念が何であるか、その明確な定義すらせずに、いきなり概念が存在することから話を作り始める。これはとんでもない失敗に結びつくかも知れない、博打的なやり方である。

(A), (B), (C) の組み合わせが意味すること、それは次のことである。

- D. 具体事例もスキーマも同様に素性の束として表現されている
- E. **具体事例と(認知科学的な意味での)のスキーマとの違いは表示の抽象度の違い以外のものではありえない**

(D, E) が私がフレームの記述装置として素性表示を採用する理由である。

以上の論点の要約として、次のことを指摘する。

- G. 素性表示は認知科学的には極めて妥当な記述装置であり、それを教条的に拒絶することから認知言語学の反科学性が始まっている

いずれにしても、認知科学的な意味でのスキーマ以外に概念的/非概念的のような区別をカテゴリカルにもちだすなら、立証責任は認知言語学の側にある。

もう一つ、Lakoff (1987) には J. Gibson のアフォーダンスの理論、E. Mayr の進化論を实在主義的であるとして批判している部分がある。**あの反实在論的 anti-realist な議論は、認知科学の基本的前提と根本的に相いれないばかりでなく、反科学的ですらある。**

このような部分を読む際、私には認知言語学の偉大な先導者としての Lakoff が動機づけ、一般化の原則、主観性の名の下に、形式的明示性と実証性を認知意味論から遠ざけ、反科学主義に誘導しているように思える。

2.8

山梨正明 2 FN は共時的な静的な知識しか記述せず、その構造の通時的な変化は記述しないのでは？

この指摘は事実としては正しい。しかし、これは

FN が理論的枠組みとして不十分だという結論には繋がらない。FN プロジェクトは自分らが何を記述しているのか、明確に意識している。FN プロジェクトが目指すのは、**ある時点—正確には、ある時間区間内—での音の体系としての言語と一般知識とのインターフェースの妥当な記述**である。「言語に関するありとあらゆること」を記述しよう、説明しようという非現実的に野心的な目標は、FN の目標ではない。

繰り返しになるが、**FN が指向するのは真に妥当な知識の記述であり**、量的にも手順的にも不適格な記述の上になされた中途半端な説明ではない。一部の認知言語学には言語の博物学になろうとする傾向が認められるが、それは FN が目指す方向ではない。博物学と生物学の区別は決定的である。後者は科学だが、前者は非科学である。

2.9

藤巻慎一 FN が工学的応用の方向を目指しているのか、認知科学的方向を目指しているのか、論文を読んだ限りでは不明確に思うのだが？

戦略的な理由もあり、この問いに正確に答えてしまうには躊躇を感じるころもある。が、差し当たり次のように答えておきたい。

まず、始めに一つお断りしておくことがある。**私**が今回の発表した研究の内容は**本家 Berkeley の FN (BFN) から見れば、異端的である**。本来、比喩性の記述には関心を寄せておらず—というか、便宜上排除している。それに対し、私は、幾つかの記述装置—例えば、意味素性対立の解消のメカニズム—を追加し、Berkeley のシステムを拡張している。この点で、今回の比喩効果の記述との関連性を強調した**私の研究発表は、BFN に関して誤った印象を与えてしまった可能性がある**。この点は自分でも反省している。戦略的には、従来の比喩研究との整合性を強調する路線で行くべきであったのだが、比喩写像理論への認知科学的な観点からの私の個人的不満が、最終的に今回の発表内容の批判的トーンを形成したように思う。

本家 Berkeley の FN は認知科学的な指向は強くない。Embodied Construction Grammar がそういう

方向性を見せているが、それが主流となっているか、怪しい感じがする。それに対し、私はオントロジー研究との関連を強調することで、認知科学的な側面を強調したい。実際、言語学者の関心は応用を指向する工学的なものというより、認知科学的な性質のものである。

しかし、私にとって**現在の最優先課題は FN に準拠しながら意味タグ体系の定義し、それを付加した日本語のコーパスを構築することである。**

私が個人的に FN に強く肩入れする最大の理由は、**それが意味タグ付きのコーパスの構築を可能にすることである。**現時点で利用可能なコーパスに付加された情報は品詞情報など、統語的な重要性なものであって、意味的に興味深いものは事実上、含まれていない。このようなコーパスですら非常に有用なものであることは存分なく示されているが、それはヒトの使用している意味体系の記述という目的のためには、まだ根本的に不十分である。**意味体系の妥当な記述という目的のためには、大規模な意味タグつきコーパスが必要不可欠であり、この種のコーパスが利用可能になることによって言語学が受ける恩恵は計り知れないと考える。**

日本語のコーパス言語学は非常に遅れている。科学的観点から見たコーパスの利用可能性は、圧倒的に低い。日本語には**バランス・コーパス balanced corpus**すら存在しない。この悲惨な現状の要因にはいろいろな理由が挙げられると思うが、その最たるものは次のようなものであると思う。一方では**生成言語学の勃興によって、言語学がデータ中心の真に科学的な科学へ移行することへの阻害があった⁵⁾**。その一方では、幾つかの技術的困難—日本語がマルチバイト言語であること—があった。しかし、どんな理由があるにせよ、この現実はなるべく早期に改善されるべきだと信じる。

⁵⁾ 私はここで、生成言語学の言語学全体への貢献が無だったと言いたいのではない。それは非常に多くの点で、重要な貢献をした。例えば、容認可能性という操作的概念の導入、統語テストの体系的な使用によって興味深い性質が驚くほど正確に記述できることなど、技法面で非常に貢献度が高い。これは生成系の研究者に敵対しがちな認知系の研究者といえども、しっかり認識すべき事実である。実際、認知系、機能系の研究者は見取り図の提示のような方向づけの面での貢献がほとんどで、技法的な面で貢献は皆無である。絵に描いた餅は、どんなに美味しそうに見えても、食べられないのである。

タグの体系、とりわけ意味タグの体系は、それを使う人の興味と関心を良く反映したものでなければならぬ。コーパスの有効性がますます明らかになりつつある現在、言語学者はコーパス利用に関して、今のような「**工学者の作った便利なものを使わせてもらう**」という受身の発想を止めて、「**本当に自分の必要にあったコーパスを自分でデザインし、それを工学者に注文する**」という能動的な姿勢を取るべきであり、そのような形で工学者と積極的に係わってゆくべきだと私は考える。これこそが私が FN を強く支持する理由である。

結局、このように言える。**私の FN への肩入れは、言語の科学者としての自分自身のためなのである。**

3 おわりに

以上の方々の批判、コメント、特に鍋島氏の質問 1、金杉氏、藤巻氏の質問は私の考えを深化させるのに大変に有益であった。この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。